

長富祐一郎氏（元大平首相首席補佐官）に聞く

大平政策研究会の意義

―聞き手・阿部 穆



大平首相夫妻、大河原良雄駐豪大使夫妻、大来佐武郎外相、長富祐一郎補佐官、左から 大平首相のオーストラリア訪問のさい、溝口シドニー総領事（左端）公邸にて（1980年1月19日）

補佐官制度は森田秘書官のアイデア

——大平さんは一九七八年二月八日に総理に就任されるわけですが、それと同時に長富さんは総理首席補佐官に就任された。これは秘書官ではなくて、総理の政策的な補佐をするという役割だったわけですが、この制度は以前からあったのですか、それとも大平内閣でつくられたのですか。

長富 これは、森田一さん（秘書官）が思いついたんです。私は当時、対外経済担当大臣の牛場（信彦）さんの補佐官をしていました。形式的には内閣審議官ですけど、実質的には牛場大臣の補佐官ということで、外務省に設けられた牛場大臣室の向かいに補佐官室が設けられ、そこに各省から五人が詰めていました。アメリカ、ヨーロッパやアジアと交渉する時に、大臣に陪席するあるいは随行して行く場合、補佐官という名称を用い名刺にも刷ってよろしいと内閣審議室（当時は清水旺室長）から言われまして、牛場経済担当大臣補佐官という名称を用いたわけです。森田さんは「これは非常にいい」と言い、「大平は政策を重視しているから、あの補佐官制度を是非、採用したい」ということになり、大平さんに「牛場大臣の補佐官は何をやっているのか、説明にこい」と、瀬田の私邸に呼ばれまして、ご説明したというのが、そもそもの始まりですね。

——牛場大臣の補佐官というのが、アイデアの発端なのですか。

長富 裏話をしますと、大平さんが総理になる前に、「自分がどういう政策をやるかということをはっきりさせてから、総理になりたいんだ。ついては、どういう政策を採ればよいか、それを考えてほしい」というご注文が、佐藤（誠三郎）先生、香山（健一）先生、公文（俊平）先生の三人にあつたわけです。牛尾治朗（ウシオ電機会長）さんもかんでいたわけですね。それで、学者だけじゃいか

んから、実務が分かっている奴がいいというんで、私にもその勉強会に参加しろという話がきたわけですよ。私は「勘弁して下さい。福田内閣の牛場大臣の補佐官をしているのに、その次の総理のお手伝いをするわけにはいかない」と言ったのですが、竹内道雄（元日本輸出入銀行総裁・東京証券取引所理事長）さんから「その立場はよく分かるが、大平さんが言っておられることだし、君の忌憚のない意見を言いさえすればいいんだから」と言われて出席したんです。その勉強会の結果が、その年（一九七八年）の一月二七日に『大平正芳の政策要綱資料』として取りまとめられ、発表されたのです。勉強会には、以上の人たちのほか、いろいろな人がきていました。

——その勉強会をやって、立场上、長富さんは表には出られないけれども、その『政策要綱資料』をまとめたということですね。補佐官には各省からどんな人たちがきていたのですか。

長富 外務省から内田勝久（現、駐カナダ大使）君、通商産業省から照山正夫君がきていました。それから若手が厚生省の大塚（義治）君とか通商産業省の高橋（はるみ）さんとか、農林水産省の沢井（義雄）君とかがきていました。その人たち以外に、研究会を九つつくりましたが、その研究会の書記役に各省から二人ずつ、非常に優秀な若手の連中が入っていました。

——『政策要綱資料』が基礎になってつくられた、九つの政策研究会は、大平総理の意思ですか。

政策研究会は大平総理の意思で

長富 総理の意思です。ただ最初から九つではなかった。例えば、「田園都市構想」と「家庭基盤

実 充実」は、一緒にやるつもりでいたら、自民党側から「家庭基盤」を別個にやれというご要望があつて、二つになったのです。

華 —— 大平さんとしては、単に大平内閣のことではなくて、二一世紀をにらんで、かなり長期的なビジョンというか、今後の日本のあるべき指針というか、あるいは長富さんも書いておられますけれども、「追いつけ、追いこせ」でやってきた日本の近代化はもうお終いで、これから先の日本はいかにあるべきか、というような指針みたいなものをつくらうじゃないか、というような意欲があつたのじゃないんですか。

長富 もうちよつと大きくて、日本だけじゃなかったですね。大平総理が最初に言われたことで覚えてるのは、「(自民)党を近代化せにゃいかんと言つておるが、今頃、近代化というのは古い。今は近代を超える時代だ」と言われたことです。「今、世の中、非常に大きな変化をしているが、皆、定かなる展望を抱けずに、ガルブレイスのように『不確実性の時代』と言っている。それじゃいかん。一体、これから人類はどういう道を歩むべきか。それをはっきりと示しておきたい」と言われた。アメリカ、ヨーロッパなど高度工業化社会を全部、視野に入れたご発言だったですね。見事なものでしたよ。私は後で大蔵省に財政金融研究所をつくらされた時に、日本語ができなくても英語さえできる人なら客員研究員として迎えようと言つて、その第一号にローレンス・サマーズ・ハーバード大学教授(現、米國財務長官)を迎えたのですが、数年前にサマーズに会つたら、「お前、これからはソフト化の時代だと、言つていたな。アメリカは情報化・サービス化・国際化をちゃんとやつて経済は隆盛になつていゝ。ソフト化を言つていた肝心の日本は、何もやつていないのじゃないか。どうなつてい

るんだ」とからかわれた。残念だったですね。

—— サマーズが、そう言ったわけですか。なるほど……。

長富 大平政策研究会で、一九八一年に、ソフトノマイゼーションという言葉を作り、これからは情報化・サービス化・国際化を特徴とするソフト化の時代だということを指摘したんですね。アメリカでは非常に反響を呼びました。随分、私はアメリカの大学に呼ばれて講演しました。大学の出版物でもかなり採り上げられました。日本でも当初は関心を呼んで、三〇〇回近く講演に呼ばれた。しかし、パブルに突入して忘れられたし、そもそも日本人は、外人の言うことは崇拜するけれど、日本人が提唱したことはあまり信用しないところがあるんですよ。(笑い)

—— 九つの政策研究会には、学者・文化人が一三〇人、役人が八人、延べ二二〇人が参加した。人類の進むべき新しい道を研究しようということだったのですね。

長富 「産業革命以降工業化を達成して、いま大きな構造変化の時代を迎えている。なぜ変化しているのか、どう変化して行くのか、どういう道を選べばいいか、それをはっきり示してくれ」というのが、大平総理のご要請でした。

—— 政策研究会は、「文化の時代」から始まって、「田園都市構想」であるとか「家庭基盤充実」であるとか「環太平洋連帯」であるとか、いろいろできるわけですけれども、これはどういう基準で九つに分類されたんですか。

長富 なぜ九つに分類したのかといわれると、総理のお考えや皆さんのご意見や自民党の注文があって、ちょっと答えにくいんですが、総理が、言われたのは六つか七つだったと思いますね。そのな

実かでちよつと変わっているのは、「対外経済政策」ですね。これは内田忠夫先生（東大教授）にお願
就いたんですが、緊急な課題で……。後は、じっくりやって行こうという話でした。それで、佐藤、公
華文、香山先生方が中心になって選任を始めるわけですが、総理は「在野の碩学を集める」という強い
去ご注文でした。「自分を売り込んで入りたがる人は入れるな」ということでした。そして、「研究会の
座長は大正生まれでも良い。しかし委員は三〇代から四〇代にしる。二一世紀にかけて第一線で活躍

するような連中を選べ」ということでした。そうすると、「自分が死んでも、じわじわとその政策が
浸透して行くであろう」と。そういうリーダーシップを持てる人間を選べというわけです。でも、も
うだいぶ亡くなられましたね。高坂（正堯）先生、香山先生、佐藤先生など。それから黒沢（洋）元
興銀頭取も。

——ところで座長役の山本七平（山本書店主）さんなどユニークな在野の賢人を探すのには、どう
やったのですか。

座長の数名は大平総理のご指名で

長富 座長には、大平総理がご関心を持っておられて、ずいぶん直接のご指名がありました。「こ
れは梅棹忠夫先生、ここは大来（佐武郎）君に頼め。これは内田先生」とか言われました。トップク
ラスの数名は（総理の）ご指名ですよ。残りの座長は佐藤先生たちにお願いで選んでもらいました。
それから、総理はあの先生方を非常に尊敬し大事にしておられて、先生方が自宅にこられると、和服

で正装し、威儀を正して、座敷の外の廊下に手をついて「よくいらっしやいました」とお迎えするんです。学者と同じ年輩のわれわれとしては、やや心穏やかならざるものを感じました。佐藤、香山、公文の三先生を中核にして、研究会のメンバーを拡げて行きました。石井威望先生（東大教授）、浅利慶太さん（劇団四季）、山崎正和先生（阪大教授）とかですね。その人たちを中心にして、こういう分野は誰がいいですかと聞いて廻ったわけです。いろいろな人が候補に上がりましたが、「一人だけに聞いている駄目だ。少なくとも異なった三方面の人の意見を聞かなければ」と言われたのでたいへんでした。最低三人の方のご推薦のある人に、アポイントを取って、私がお目にかかってお願いしました。一番、手こずったのが本間長世先生（東大教授）ですね。何回、お願いに行っただけかなあ。「嫌だ。私は政権（研究会）には近づきたくない。学者の良心に悖る」と言われましてね。たいへん、苦労しました。

——そうでしょうね。長富さんも書いておられるけれども、つまりその「政府とか政党とか政治とか、そういうのに関わりたくない」という人が結構、多いわけでしょう。「推薦されたことは名譽だけども、ノー・サンキューだ」という人は、結構いたわけでしょう。

長富 名譽だとは言わなかったですね。はっきり「嫌だ」という人はいましたね。
——それをいかに口説くかで、長富さんはいへんな努力をされたわけでしょう。

長富 「苦労しました。大平総理は自分の一政権のためにお願いとまでは言っておりません。自民党とか大平内閣とかは忘れていただいて結構だから、どうするか考えて、人類の過去の歴史を踏まえ将来を展望して指針を出していただきたい。大平内閣で役に立たなくても結構なんです。総理もそう

実 言っています」と言つて、学者の良識に訴えていつたんですけど……。

就 — それで、それぞれの研究会が会合を聞いて、討議するわけですね。大平内閣は一年半で、八年六月一二日に総理が亡くなって退陣するわけですが、この実質一年半の間に三つの研究グループが去 答申を出すわけですね。それは何と何ですか。

長富 八 年に入つて、まず四月二一日に「対外経済政策」研究グループ、次に五月一九日に「環太平洋連帯構想」研究グループ、さらに五月二九日に「家庭基盤充実」研究グループが報告書を出しました。家族基盤の時は研究員が夫妻で招かれて打ち上げパーティをしたのですが、総理は次の外人とのアポイントがあつて佐藤嘉恭秘書官（前中国大使）がハラハラするのに、いつまでも歓談しておられました。それが総理の元気なお姿の最後でした。「環太平洋連帯構想」だけは中間報告を出せと言われて、七九年一月一四日に出しました。総理は「これを推進するんだ」と言われて、研究グループの議長だつた大来佐武郎さんを外務大臣に任命して、あまり乗り気ではなかつた外務省を口説いて、一九八年の一月一六日にオーストリアに行つて、環太平洋連帯構想を打ち上げるわけです。環太平洋連帯構想を担当していた私は、隨行を命じられました。

— 当時、外務省は、あれには相当、抵抗していましたね。

環太平洋連帯構想への抵抗と展開

長富 どの役所でもそういう傾向があるのでしようが、外務省は、官邸が頭越しに外交政策を決め

ることには非常に強く抵抗してしまいましたからね。最近はずっと変わりましたけれども。外務省に一言の相談もなく環太平洋連帯構想なんてことを言い出したのはけしからん、という感じが強かった。ともかく大平さんが総理に就任しての施政方針演説に「環太平洋連帯構想」という言葉を使わせてもらえないんです。「アジア・太平洋地域協力」という立派な言葉があるので、それを使えと。これは笑い話みたいなものですが、外務省の抵抗が強いので中間報告を作成している時に、大来さんのお伴をして担当局長に説明に行きました。そこでアポイントの時間より三〇分待たされた。後で大来さんは外務大臣になるわけですが、私は担当局長から「君はひどいじゃないか。大来さんが大臣になるなら、なぜ教えてくれなかったのか」と叱られました。

——ところが意外にも、オーストラリアのフレイザー首相が前向きで、「それは結構だ、やるつもりじゃないか」ということで、環太平洋連帯構想はぐっと進むわけです。

長富 あの時 は ANU（オーストラリア国立大学）のクロフォード学長が大来さんの親友であり、またフレイザー首相とも非常に仲が良く、さらに大来さんと大平総理が興亜院以来の親友ですから、非常にうまくいきました。私は出発の前日までその運びに苦慮していて、大来さんに「首脳会談初日の昼休みにクロフォード学長にアポイントメントを取って打ち合わせて合意を取り付けて下さい」と申し上げたんです。大来さんは「総理は大丈夫か」と言われるので、「総理の了解を取っている暇がありません。総理のほうは私が責任を持ちます」と申し上げました。そしてキャンベラへ向かう飛行機に乗ってから、総理に申し上げたんです。「環太平洋連帯構想は、明日の昼休みに大来さんがクロフォードさんと打ち合わせるようになっていきますので、首脳会談の議題にするのは、その返事待っ

実て、午前中の予定を総理の提案で午後へ廻して下さい」と。総理はすぐに「分かった」と言われまじ就た。ANUには外務省の堂ノ脇光朗審議官（現外務省軍縮担当参与）に同行してもらいました。

華 大来さんは吉報を持って帰ってこられました。総理に詳細をご報告する時間がありません。そこで、首脳会談で首脳以外が発言するのは異例ですが、総理に「環太平洋連帯構想の話が出たら、大来

去 君がクロフォード学長に会ってきているので、その報告を聞きましよう、と言っていただきたい」と申し上げました。総理は「分かった」と言われて、その通りになったのです。大来さんが「ANUは、心から歓迎する、定期的に会合を開きましよう、第一回目はANUがスポンサーになると言っている」とおっしゃって、「ANUが賛同し主催するなら、オーストラリア政府は全面的に支援する」と、フレーザー首相が直ちに言われて、それで一挙に決まったわけです。

——環太平洋連帯構想を最初に大平総理にインプットしたのは、大来さんですか。

長富 名前は別にして、構想自体は大平総理のオリジナルなものです。大平さんは、興亜院の（役人）時代に張家口の砂の中で生活していて、何処か（青島か上海か）から太平洋を見た時、「これからは太平洋の時代だ。とくに四囲を海に囲まれている日本にとってはそうだ」と強く感じたそうです。その時からの構想なのです。それから森田さんから聞いた話ですが、大平さんは独自に太平洋を経済距離で測った地図をつくらせて、太平洋がいかに狭いかを考えていたそうです。その地図をライシヤワールさん（駐日大使）に見せたら、ライシヤワールさんも同じ地図をつくらせていて、二人はすっかり意気投合して、太平洋を巡る構想を熟っぽく語り合ったそうです。大平さんが総理になる前の勉強会で、この構想の「ネーミングを考える」と言われたのですが、ほとんどの名称はすでに使われてい

て、ようやく考えついたのが「環太平洋連帯構想」だったのです。

——あれは英語ではパシフィック・ベイソン（Pacific Basin）になっているのに、パシフィック・リム（Pacific Rim）という言葉がよく使われていますね。

長富 そうなんです。パシフィック・リムと言うと、周りだけで南太平洋諸国の人々が自分たちは抜け落ちていのかと言うので、最初から環太平洋連帯構想にかっこ書きで、わざわざパシフィック・ベイソン・コミュニティ・コンセプト（PBBCC）と書いておいたのですが、そういうことには無神経な欧米の人たちが、パシフィック・リムという言葉を使って、それが広く伝わったのです。

——オーストラリアの政府とANUの協力を得られて、環太平洋経済協力会議（PECC）がスタートするわけですが、現在はAPECC（アジア太平洋経済協力）が大きな組織になっていますね。あれも、あの時に大平・フレイザー会議で打たれた一石が、拡大して行ったと思っておられますか。

環太平洋経済協力会議のスタート

長富 ちよつとPECCを振り返りますが、環太平洋連帯構想を提唱するときに、学者が非常に強く指摘したのは、一つの国が国際的な大きな構想を提唱できるのは、三〇年か四〇年に一度くらいしかない、日本は「大東亜共栄圏構想」で失敗しているのです、今度、失敗したら当分、日本はこういう構想を提唱できないから、慎重にやる必要があるということでした。われわれとしては、大東亜共栄圏構想の焼き直しではないか、と言われないうちに非常に配慮しました。ネーミングも、先に述べた

実 ように、当初は「環太平洋連帯構想」で、大平さんの六月の逝去後、九月にオーストラリアのANU
就 で大来さんが日本委員会の委員長になってスタートするのですが、大平さんも亡くなつたので、その
華 後、外務省が日本語の名称を、今のようにアジア・太平洋地域経済協力に変えたんです。別にどちら
去 でもいいと思いますが……。

——大東亜共栄圏の亡霊がまだ生きていたわけですね。

長富 生きていたかどうかは別にして、混同されないように十分に注意しました。両者の決定的な
違いは、大東亜共栄圏構想が日本の理念なり思想を一方的に押しつけようとしたのに対し、環太平洋
連帯構想は、この地域の文化や歴史や民族の多様性を承認し、その中で共生と繁栄を図ろうというこ
とですね。そこで、この新しい構想をどう提唱するのですが、大東亜共栄圏の構想で一番被害を受け
ているのはアジアですから、そこにまず提唱すると大東亜共栄圏の悪夢を思い出して反発が強いので
はないか、と懸念しました。したがって、アジアに話をするのは後回しにして、まずオーストラリア
に話をして、その賛同を得てから、やんわりとアジアを包み込んでいこうということになって、オー
ストラリアのフリーザー首相に提唱したわけです。それからニュージーランドに回ってマルドゥーン
首相にも提唱して、両方から大歓迎されて、その反響が日本の新聞にも大きく採り上げられたわけ
です。それからASEAN（東南アジア諸国連合）に話をしていくわけです。ASEANの中でも賛
成・反対の両論がありまして、タイなどからは賛同を受け、第二回PECC会議はタイが開催を引き
受けてくれました。シンガポールも最初から賛成してくれていました。

もう一つ、大東亜共栄圏との関係で注意したのは、イニシアティブの取り方でした。日本はもっと

明確にリーダーシップを発揮しろという声が海外からも強かったのですが、あえてそれを避けました。開催国を日本にするのも、ずっと後にしました。また、日本政府が正面に出すぎるのを避け、学・民・官の三者構成にしたのです。もっともすぐに、途上国には「民」が育っていないことを発見し、困りましたが……。

第一回の会合は A N U によって九月にキャンベラで開かれ、日本からは大来さんはじめ、佐藤先生、山澤（逸平）先生らも出席されまして、会議は成功しました。あの時、一年半に一遍、廻り持ちで開こうということになりました。A P E C ができてからは二年に一遍に変わりましたが、徐々に定着して行ったのです。

——それが定着して、今度は A P E C 構想となって行くわけですね。

アジア・太平洋経済協力構想の展開

長富 そうなのですが、A P E C の話が出る頃、私はたまたま大蔵省で貿易問題を担当する関税局長をしていました。その頃、アメリカから自由貿易協定をカナダと同様に日本と結ぼうという申し入れがあったのです。竹下登総理の時ですけど、日本は困って「そんなわけにはいかない。日本はアジアもあるし」というようなことを言っていました。私は竹下総理に「日本がいつまでも煮え切らない態度を取っているのは好ましくない。これは前向きに受け止めることにして、太平洋地域でこの問題を検討する勉強会をつくりましょう」と申し上げて、竹下総理がオーストラリアを訪問された時に私も随行しましたので、この構想をオーストラリア側に提唱し、事務次官レベルの会合を、その年の秋に

東京で開催したのです。

ところが、翌年（一九八九）一月にオーストラリアのホーク首相が韓国を訪問した際、いきなり閣僚レベルの会議の構想をソウルで打ち上げたのです。これには驚きました。すぐにオーストラリア側に問い合わせたのですが、オーストラリアは行政改革によって外務省と通産省が統合されたばかりで、事務当局も寝耳に水で、旧外務省が言い出したのだろう、いや旧通産省だろうとお互いに不快感・不快感を表明している。結局、ホークさんがソウルに連れて行った少数の人たちに話をして急に打ち上げたことが分かりました。

——そういうことがありましたね。

長富 私は竹下総理に呼ばれまして、PECCの関係もあり「ホーク提案をどう考えるか」と聞かれました。私は「PECCは、日本政府が正面に出てイニシアチフを取るのを避けようということ、学民官の三者構成でやってきましたが、そろそろ閣僚レベルで取り上げていい時期じゃないかと思う。しかし、ただ、ホーク構想は非常に問題がある。まず第一に、あれは『アジア・大洋洲構想』で、アメリカとカナダを排除している。アジア地域の問題を考える場合にアメリカを除くことは考えられない。アメリカ、カナダを入れた『アジア・太平洋経済協力構想』にすべきだ。第二に、多様性の中で協力し発展してきたASEANの教訓に学んで、ASEANの意向をよく聞くことが必要である。第三に、この協力構想はアジア・太平洋地域以外にも開かれたものとし、その利益は他の地域にも均霑されることが必要である」と申し上げました。竹下総理はホーク首相に、この三つの条件を呑むのであれば、日本は受けるといふ親書を送られました。その後、アメリカもオーストラリアに嚴重なクレ

ームをつけてオーストラリアは各国に次官クラスを派遣して説明しました。私のところにもきました。こうして、第一回目のAPECの会合が一九八九年二月にキャンベラで開かれるのです。開かれるわけですが、根廻しが悪いものですからASEAN側が猛反発して、インドネシアのアリ・アラタス外相は空港で新聞記者に、「私はそういう会議があることは知らない。ただ、たまたまきて見たら、何かそんな会議が開かれるそうなので、場合によっては出てみようと思っている」と会場で話したような具合でした。ASEAN側は、会議の前日の遅くまで、延々と対応策を議論していて、私はその様子をインドネシアのユースフ・ワナンディ教授（後に商工大臣）から聞いていました。また、この時たまたまシドニーに向かう飛行機の中で韓国の大使と一緒にあって、「この会議がスタートすれば、PECCと同じようにASEANと非ASEAN国で交互に開催することになるだろう。第二回目はASEANとして、第三回目の会議はぜひ韓国でやりたいので、手を挙げるから日本はサポートしてくれ」と頼まりました。

——話を大平研究会の話に戻して、「家庭基盤充実」というのは、基盤だけは国がやるけれど、価値観が多様だから国は家庭の中には手を入れない、という発想で素晴らしいのですが、あれは大平総理の考え方なのですか。

「家庭基盤充実」研究会でのエピソード

長富　そうです。あの会議の時には、いろいろ驚きました。大平さんは「家庭の中まで政府は手を

突つ込むものじゃない。家庭というのは皆がつくるものであって……」と言われました。それはいいのですが、委員の中から「外人との結婚も当然に自由な前提にすべきだ」というのは当然としても、華「入籍は問題にすべきでない」から「レスやホモの夫婦も認めるべきだ」などいろいろな意見が出されました。それから、小林登先生（東大医学部教授）が「育児というのはマイナス零歳からの育児を去考えなければならず、母親と子供との肌の触れ合いが重要だ」と、言われた途端に、女性委員からた

いへんな反論が出ました。皆さん仕事を持っていて、そんな暇はないんですね。大平総理からはメンバーの選定に当たって「普通の主婦の代表を入れる」と言われていたんですが、それを見つけるのが難しかった。その場は、橋田寿賀子さん（脚本家）が、「貴女方は普通の家庭の主婦ではないのよ。小林先生は貴女方のことを言っているのではない」と言われて収まりましたが……。

——話が前後しますが、三つの研究グループが答申を出して、後の六つはまだ出なかつたわけですね。この六つが出たのは伊東正義首相臨時代理の時ですか。

長富 そうです。大平総理が亡くなられてから一カ月半ぐらい経ってからですね。

——そうすると全部、出たわけですね。だけど、そのフォローアップというのは、なかなか行われなくて……。次の鈴木（善幸）内閣はほとんど関心がなくて、その次の中曽根（康弘）内閣になった時に、中曽根さんがまた佐藤さんや香山さんと呼び掛けて、「大平内閣の時にあれをやったのは非常にいいことだから、もう少し具体化しようじゃないか」という話になるんですが、その辺は何か聞いておられますか。

長富 それは半分、正しいんですが……。浅利慶大さんが、中曽根さんをサポートしていて、行管

庁長官をしていた中曾根さんに、「あなたは行革大臣として行革を断行しなさい。大平さんの構想も受け継ぐのがいい」というような話をされたようで、大平内閣の時の話もしたようです。それで私が中曾根さんに呼ばれて、ご質問に答えている説明しました。そしたら「あれ（研究会報告書・全九冊）は全部、俺は読んだ。なかなかいいから、俺が引き継ぐ」と言われたんです。そして「誰がいいか」と聞かれたので、あの三人の先生方（佐藤、香山、公文）のことを申し上げました。中曾根さんは話をよく聞き、赤い万年筆でいちいちメモするのは驚きましたね。

——中曾根さんは、昔からメモ魔なんですね。『中曾根内閣史』があるように、とに角、記録をたくさん残している人ですね。そういう意味じゃ、大平さんとは全く対照的ですね。大平さんは、記録はほとんど残していないけれども、中曾根さんは見聞したこと、これは大事だと思ったことは、皆メモしますね。これは一種の才能なんじゃないですかね。

それで、話を元に戻しますけど、いろいろな研究グループがあるけれども「環太平洋連帯構想」研究グループに限って言うと、司馬遼太郎さん（作家）に褒められたという話がありますが、これはどういうことですか。

長富 大平総理は、いろいろな方にお会いして話を聞くのを好んでおられました。多くの方にお会いになりましたが、非常に会いたがっておられて断乎として拒否されたのが、司馬遼太郎さんです。「自分は大平さんに関心は持っており、いろいろ話はしたいが、自分は権勢の座についている人間とは、絶対に会わない。だから大平さんが下野し、一野人になったら、喜んでお会いします」という回答だったのです。それで総理が亡くなった後、大蔵省の局長クラスを集めた昼の勉強会で司馬先生に

実 お話を伺う時に、「大平総理が先生にお会いできずに残念がっております」と申し上げたら、「環太就平洋という言葉は非常に良かったですね」と言われて、しばらく宙を見て「私はあの言葉を聞いた時に、目の前がパーツと開かれたというか、目から鱗が落ちた気がしました。日本は明治以来、脱アジアかアジアは一つかという論争をしてきたけど、あの言葉は両方を包含している。実に良い」とおっしゃったんです。私は、「その言葉を聞いて太平総理は墓場の陰から喜んでおられるでしょう」と申し上げたのですが、それが非常に印象に残っているんです。

——当時の官房長官だった伊東（正義）さんも亡くなりましたが、私が伊東さんに生前、お会いした時に、伊東さんは「大平君は総理大臣になったけれども、やりたいことはほとんどできなかった。大平内閣の実績というのは正直言っていないだよ。ただ一つ言えることは、将来に向かって、処方箋（政策研究会報告書）を書いた。これが今後、生きてくるんじゃないか」と言われておったのですけども、それはどう思われますか。

大平総理は研究会によく出席された

長富 あの処方箋を今だにまた読み返している人が何人かおられて、藤井宏昭さん（国際交流基金理事長）は「読み返しているけど、まったくあの通りで、現在も指針として生きている」と言っておられます。「あれはいい」と年賀状に書いてくる人もまだ何人もいますね。まさに、大平さんのあのブレーンは卓見であったが、それを皆アメリカにやられちゃって、日本はすっかり遅れちゃった。も

し、あの時にあれをやっていたら日本はこんな遅れなかっただろうという人もいるし、遅ればせながら、あの方針でやって行く以外にない、と言っている人もいる。そのなかで、環太平洋連帯構想などは、かなり早くから進みましたね。情報化・サービス化・国際化を特徴とするソフト化やそのほかの指摘もいま、その報告書の方向に進んでいると思いますね。

—— こういう研究グループを大平総理が積極的にやってみようじゃないかと決断されたのは、どこからきているのでしょうかね。

長富 自分の信念じゃないですか。だから、たいへん熱心だったですよ。研究会にもよく出席しておられて……。

—— 九つの研究会で大平総理は、どんな発言をされたのか、その記録は残っていますか。

長富 第一回目は、どこの研究会へ行っても同じことを言っておられましたよ。「内閣のものではない、一自民党の話でもないので、内閣の支持率なんかは一切、気にしないでいいから、皆さん、自由に議論して、自分がいいと思うものを出していただきたい」と。総理が入ってこられた時に、阿木耀子さん（作詞家）が「内閣が歩いてくる」と言ったのは、印象的でした。そのうちに田中六助官房長官に叱られますね、「お前、この忙しい総理を何時間、研究会に使う気だ」と。しかし「総理がこられるですよ」と答えたのです。

—— 田中六助さんは、どちらかというと政略型ですから……。

長富 いや最初は、田中さんも非常に熱心だったんですよ。かなりサポートしておられましたね。

—— 大平総理ご自身が出たいわけでしょう。学者の議論を聞いて、何かコメントというか感想を洩

突 然したと思うのですが……。

就 長富 記録としては残っていませんが、研究会で田園都市国家構想の中間報告を聞いた時に、総理はふつと横を向いて「猫や犬がいないな」と言われたんです。われわれは驚きましたね。確かに、緑が必要だとか何とか書いてあるのですが、犬や猫はいないわけですよ。学者も皆、愕然として「忘れていました」と……。

——大平さんには「日本はこのまま行ったら早晩、行き詰まるのではないか」という考え方があったのでしょうか。

脱工業化の先を問うた大平総理

長富 ともかく近代化・工業化を達成した先進工業国は、これから第二の新しい道を歩まなければいけない。それを皆、気がついていない。それを皆によく伝えなければいかん。その方向に、日本も進まなければいけない、というお考えというか、信念をお持ちでしたね。

——それは単なる脱工業化というんじゃないで、もう少し先のことですか。

長富 先のことなんです。それで「いま、脱工業化ということが言われているんだが、じゃ脱工業化してどういう方向へ行くのか、というのが示されていない」と言っておられました。未来軸とどうか文化軸とどうか、「何か進むべき道、進路とか道標を示してほしい」ということを、しきりに言っておられました。私も大平さんが亡くなった後に、研究会報告書を全部、読み返して整理してみ

て、まとめていくたびに「ああそうか、大平さんはこういうことを言っておられたのか」と分かってきたのです。汗顔の至りですね。

——長富さんが一番、「ああそうか」と思われたのは、何だったのですか。

長富 やっぱり、これから工業化という時代が終わって、新しい道はこういう方向に行かねばならない、ということを見てたんだなあ、それを言いたかつたんだなあ、ということですよ。ただ、それを総理は自分の言葉ではその後は語らずに、学者が言うのを「そうか、そうか」と聞いていただけです。例えば、情報化・サービス化・国際化・ソフト化にしても、そうです。

——そういう会の幹事役というか世話役として、長富さんは一年半、それに没入されたわけでしょう。いまから考えて、どういう感じですか。

長富 いやあ、あの一年半がなかったら、いまの私の人生はなかったでしょうね。ものすごく教えられたし勉強になりました。私のこれからの人生は、一つ大平総理の政策の実現に努めてみようと思、(社)研究情報基金(FAIR)も、そのためにつくったんですけれど……。

——しかし、それだからこそ、長富さんは単なる大蔵官僚じゃなくて、広い世界と付き合うようになられた……。

長富 その通りでしょうね。大蔵省の異端児と言われ続けてきましたけど、私が、何をやってきたかという、随分長い間アジアの発展の問題に取り組み、アジア・太平洋経済協力構想に随分努力してきました。一昨年、小淵(恵三)さんが総理になられて、「日本経済の再生のために、雇用創造と新産業・ベンチャー企業の育成のために、政府も全力を尽くすが、お前も民間の力を集めてやってく

実れ」と言われて、この一年半、それに没入しています。「雇用創造研究会」を設けて、その研究成果の実践に努めたり、エイチ・アイ・エス（H・I・S）の澤田（秀雄）さんやパソナの南部（靖之）さんなど、ベンチャーの各方面の代表的な人たち八人と一緒に、ベンチャー企業を育成するための株式会社ジーミック（G・M・I・C）をつくったりしています。これも、やっぱり大平さんの研究会がなかったら、ここまで旧世界にとつぷりとつかつていた人間が、まるで違つた新世界に足を突っ込むことはなかつたでしょうね。しかも、やつていることがすべて大平総理の政策構想の方向なので、いまだに大平さんに勉強させられていると思つています。

（平成二二年二月八日、FAIR事務所取材）

長富祐一郎（なかとみ・ゆういちろう） 一九三四年、兵庫県出身。五八年東大法学部卒、大蔵省に入省、六一年在米大使館書記官、七五年広報室長、七八年一月対外経済担当大臣補佐官、同年一二月大平総理大臣首席補佐官、八二年大臣官房調査企画課長、八三年大臣官房審議官、八七年日本銀行政策委員会委員、八八年閣税局長、八九年財政金融研究所長、九一年退官。同年株Q U I C K総合研究所取締役理事長、現在、（社）研究情報基金運営理事会議議長、（財）大平正芳記念財団、（財）世界平和研究所各評議員。著者に『安定成長時代の公社債市場』『近代を超えて 故大平総理の遺されたもの』上下、『ソフトノミックスの提唱』『文明改革期の日本』など。